第4章　西坪岩屋谷遺跡の調査成果

第１節　遺跡の概要

１　遺跡の立地（第55図、写真６、PL.34・35）

西坪岩屋谷遺跡の位置する丘陵は、大山北麓から派生し、日本海へ向けて緩やかに傾斜する。調査地の標高は約48.5 ～ 52.5mである。また、丘陵一帯を縫うように大小の谷が開削されており、調査地の南西側は、調査地付近より斜面となり、調査地南側は谷地形となっている。調査地の東側は、東坪中林遺跡と隣接する。

調査前の現況は、雑木林及び竹林として利用されていた。第二次世界大戦中及び大戦後には、調査地周辺では松根油の抽出を目的とした松根採取が行われていたといわれ、調査時においても、採掘坑と思われる円形又は不定形の穴を多数確認した。

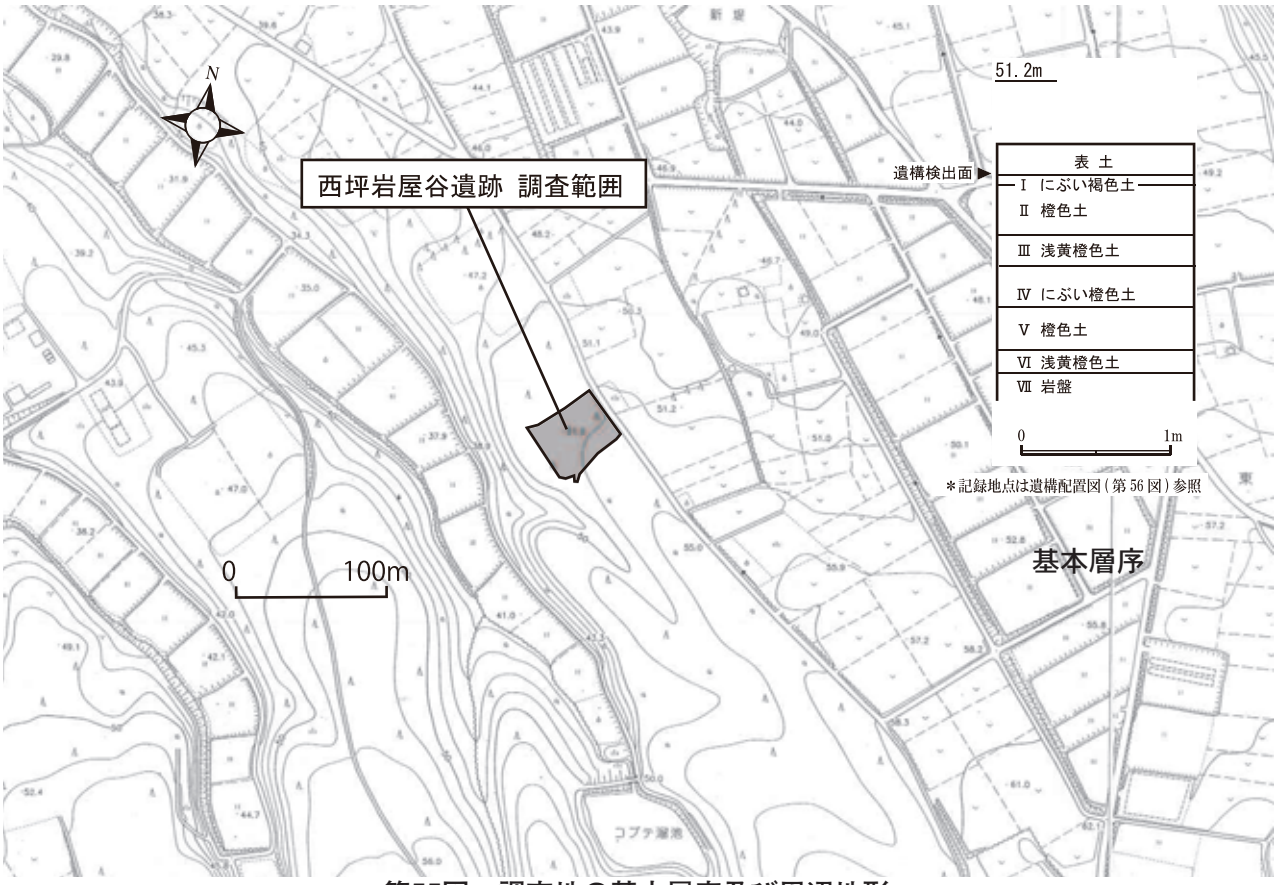
写真６　松根採掘坑

２　基本層序（第55図、PL.40）

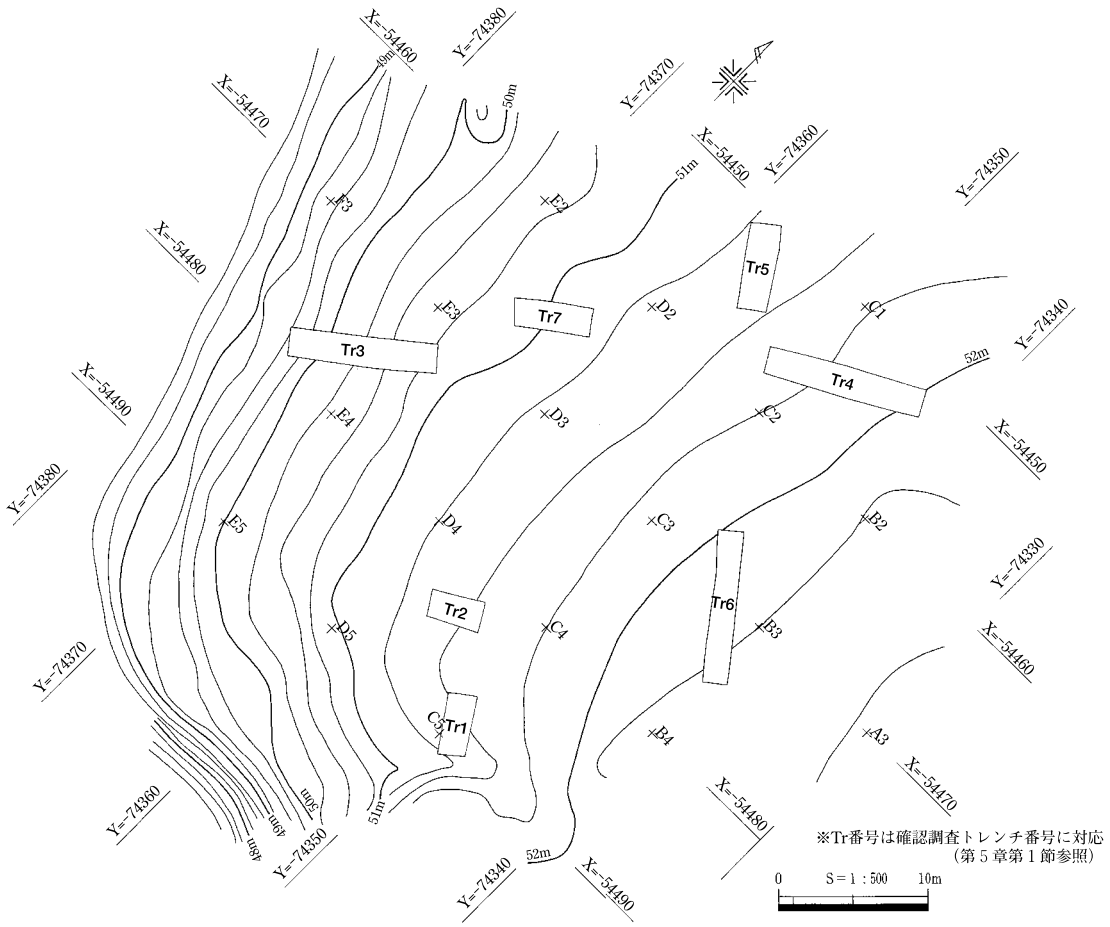
調査地内の基本的な堆積については、Ｄ・Ｅ３グリッドにあたる、確認調査Tr３（第５章第１節）設定地点において記録を行った。以下、その概要を述べる。

表土：３層に分層できる。地表面にあたる１層目は、いわゆる腐葉土である。締まりは弱い。

２層目は、にぶい褐色土である。調査地平坦面に堆積し、やや締まりが強い堆積である。当層が松根油



第55図　調査地の基本層序及び周辺地形



第56図　調査前地形測量及び遺構配置図

採掘坑に堆積することを確認した。

３層目は、暗褐色土である。調査地平坦面に約９～25cmの厚さで堆積する。確認調査時に遺物の出土が認められず、土壌化も進んでいることから、表土として扱った。

Ⅰ層：にぶい褐色土(7.5YR5/4)。ローム漸移層である。当層上面が遺構検出面となる。調査地南側平坦面を中心に堆積するが、土壌化が進み、遺存状態は悪い。

Ⅱ層：橙色土(7.5YR6/8)。いわゆるソフトローム層あるいは、姶良Tn火山灰（ＡＴ）の２次堆積と思われる。Ⅰ層の堆積範囲が限られていたため、主に当層上面が遺構確認面となった。

Ⅲ層：浅黄橙色土(10YR8/4)。乳白色を呈するローム層。

Ⅳ層：にぶい橙色土(7.5YR7/4)。硬く締まったローム層。

Ⅴ層：橙色土(7.5YR7/6)。Ⅳ層よりも、やや明るい橙色を呈するローム層。西坪岩屋谷古墳の周溝の深い箇所では、当層まで掘り込まれている。

Ⅵ層：浅黄橙色土(7.5YR8/6)。Ⅴ層よりも、やや白みがかるローム層。岩盤由来の小礫を含む。

Ⅶ層：岩盤層。

３　調査の概要

周知の埋蔵文化財包蔵地である西坪岩屋谷遺跡では、平成20年度一般国道９号名和淀江道路の改築に伴い、確認調査の必要が生じ、トレンチ調査を行った(第１章第１節)。調査の結果、丘陵平坦面においては遺跡が現存することが確認でき(第５章第１節)、本発掘調査を行った。

本発掘調査の結果、古墳の周溝１基、溝５条、土坑３基を検出した。全体的に遺構密度、遺物量共に希薄であった。遺構名称については調査時と報告時が異なるため、表17に対照一覧を示した。なお、本発掘調査報告遺構名と確認調査報告遺構名(表21)は、同一の遺構については統一した名称を付した。

本遺跡の主要な遺構である西坪岩屋谷古墳は、墳丘が調査地外に現存し、単独で立地する。調査は、周溝の1/4程度が対象となった。周溝内からは、確実に古墳に伴うと判断できる遺物は出土していないことから、古墳の築造時期は不明である。

５条の溝はいずれも帰属時期が不明であるが、平面的に並行、あるいは直交する位置関係を示し、ほぼ同規模の掘り方をもつことから、それぞれが有機的なつながりをもつ遺構群と考えられる。土坑３基は、いずれもいわゆる落とし穴状の土坑であり、遺物は出土していない。

調査地内から出土した遺物としては、土器では弥生土器・土師器・須恵器などがある。土師器と須恵器は主に古代に帰属するものである。また少量ながら、サヌカイトの石核・剥片、黒曜石剥片も出土した。

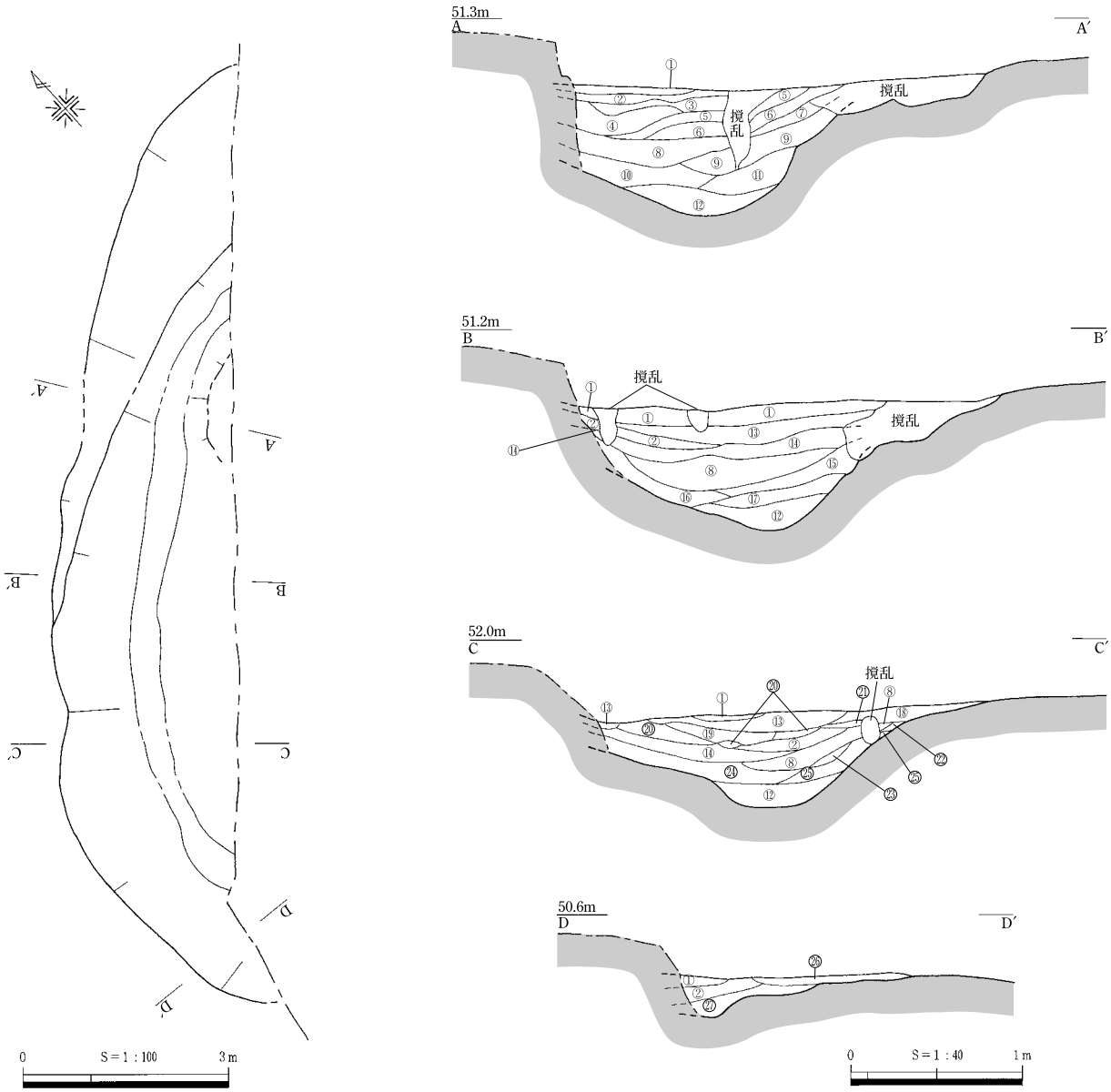
表17　遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名
西坪岩屋谷古墳周溝	西坪岩屋谷古墳周溝
ＳＤ１	ＳＤ２
ＳＤ２	ＳＤ６
ＳＤ３	ＳＤ５
ＳＤ４	ＳＤ８
ＳＤ５	ＳＤ９
ＳＫ１	ＳＫ２
ＳＫ２	ＳＫ３
ＳＫ３	ＳＫ８

第２節　調査の成果

１　西坪岩屋谷古墳（巻頭PL.２、第57～59図、表19・20、ＰL.35～38・41）

本遺構は平成20年度確認調査Tr１において確認された遺構である(第５章第１節)。調査区南東側の緩斜面、Ｂ４・５、Ｃ４・５グリッドに溝の一部を検出した。溝の南東側の大半は調査区外に現存するものと考える。溝の南東側の調査区外には、西坪岩屋谷古墳の墳丘が現況で確認でき、墳丘との



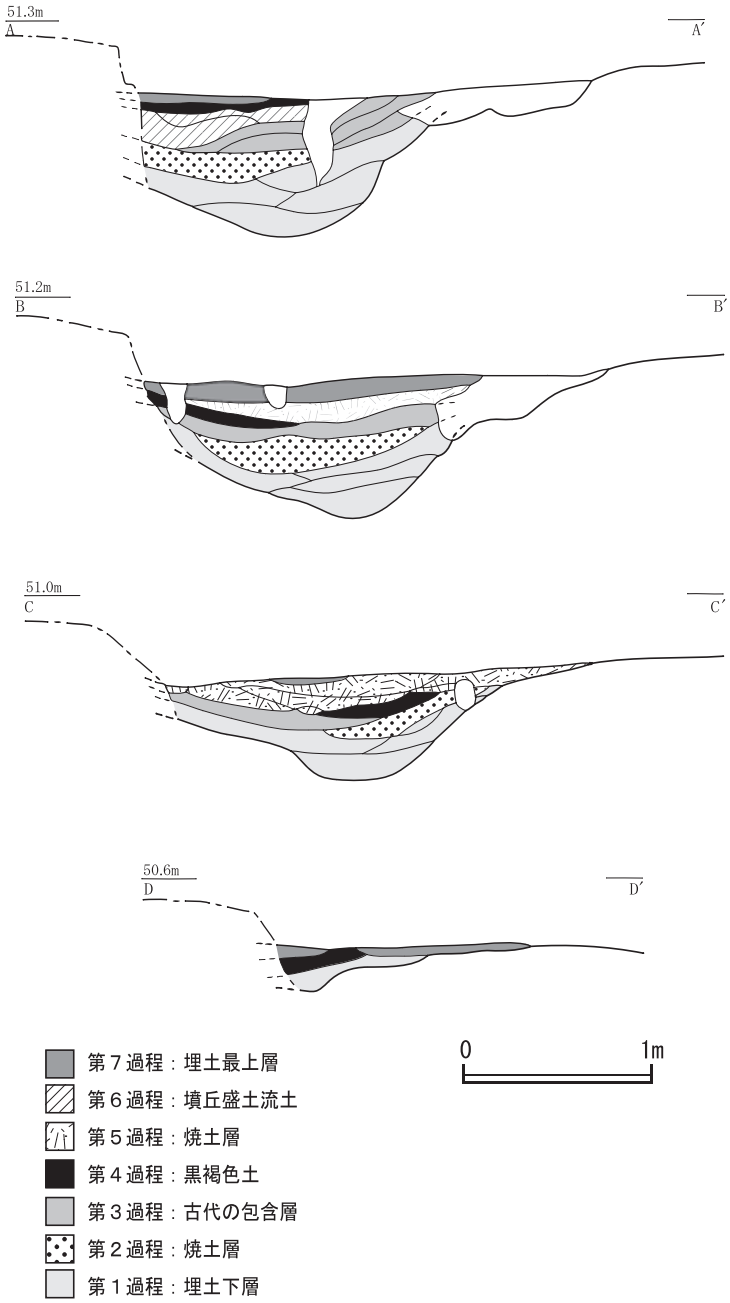
① 灰黄褐色土（10YR4/2）φ0.5cm以下の炭粒混。φ１cm以下の焼土粒混。
② 黒褐色土（10YR3/1）φ１cm程度の灰黄褐色土ブロック混。φ0.5cm以下の焼土粒微混。
③ 灰黄褐色土（10YR4/2）φ１cm程度のロームブロック混。
④ にぶい黄褐色土（10YR4/3）φ１～５cm程度のロームブロック（明黄褐色：10YR6/6）多混。墳丘盛土の流土か？粘性強。
⑤ 灰黄褐色土（10YR4/2）φ１cm以下のローム粒混。
⑥ にぶい黄褐色土（10YR5/4）φ１cm以下のローム粒・焼土粒・炭粒少混。
⑦ 黄褐色土（10YR5/6）φ１cm以下の炭粒少混。
⑧ 灰黄褐色土（10YR5/2）φ１cm以下の炭粒、φ１cm程度の焼土ブロック・ロームブロック混。当層中で焼土検出。
⑨ にぶい黄橙色土（10YR6/4）φ１cm以下の炭粒少混。
⑩ にぶい黄橙色土（10YR6/3）φ１cm以下の炭粒混。
⑪ 黄褐色土（10YR5/6）φ１cm以下の炭粒少混。
⑫ にぶい黄褐色土（10YR5/4）φ0.3cm以下の炭粒微混。φ0.3cm程度の地山小礫微混。
⑬ 灰黄褐色土（10YR5/2）φ１cm以下の炭ブロック多混、焼土ブロック混。
⑭ 褐灰色土（10YR4/1）φ0.5cm程度の灰黄褐色土粒混。φ１cm以下の炭粒、焼土粒少混。
⑮ にぶい黄橙色土（10YR6/3）φ0.5cm以下の炭粒微混。φ0.5cm程度の灰黄褐色土粒少混。
⑯ にぶい黄橙色土（10YR6/4）φ0.5cm程度の灰黄褐色土粒少混。
⑰ にぶい黄橙色土（10YR7/3）φ0.3cm程度の地山小礫微混。締りやや強。
⑱ にぶい黄橙色土（10YR6/4）φ１cm以下の炭粒少混。
⑲ にぶい黄褐色土（10YR5/4）φ１cm以下の焼土・炭ブロック多混。
⑳ にぶい黄褐色土（10YR5/3）φ１～２cmの焼土ブロック（7.5YR6/6）が主体をなす。φ１cm以下の炭粒混。
㉑ 灰黄褐色土（10YR5/2）φ１cm以下の炭粒少混。
㉒ にぶい黄橙色土（10YR6/4）㉓層と類似。
㉓ にぶい黄橙色土（10YR6/4）粘性やや強。
㉔ 明黄褐色土（10YR6/6）φ１cm以下の炭粒少混。粘性やや強。
㉕ 明黄褐色土（10YR7/6）φ１cm以下の炭粒少混。粘性やや強。
㉖ にぶい黄橙色土（10YR6/3）φ0.5cm以下の灰黄褐色土粒少混。粘性やや弱。
㉗ にぶい黄褐色土（10YR5/4）φ0.3cm程度の炭粒微混。

第57図　西坪岩屋谷古墳（１）

近接した位置関係から判断し、検出した溝は西坪岩屋谷古墳北西側周溝の一部と考える。墳丘周辺の地目は山林であり、竹林および雑木林となっている。西坪岩屋谷古墳に近接する古墳は確認されていない。

周溝は、表土下Ⅰ層直上において検出し、掘削はⅤ層にまでおよぶ。検出面の標高は概ね 50.0 ～ 51.5m、底面の標高は概ね 49.9 ～ 50.1m である。周溝外側から周溝底面までの落ち込みを確認し、墳丘側の立ち上がりは調査区外となる。検出した平面形より円墳と考えられ、周溝外周で計測した周溝規模は直径９m 程度と想定している。確認できた周溝の規模は、検出面での幅が約 2.6m、検出面からの深さは最深部で約 1.1m である。溝の断面形はＵ字状を呈すと思われ、上部はやや外反する。底面には、埋葬施設などは認められない。

埋土は４地点で堆積状況を記録し、27層に分層できた。堆積状況を検討した結果、周溝が埋没する過程は大きく７つに分類できることがわかった（第58図）。その埋没の過程を堆積順にそって、説明したい。

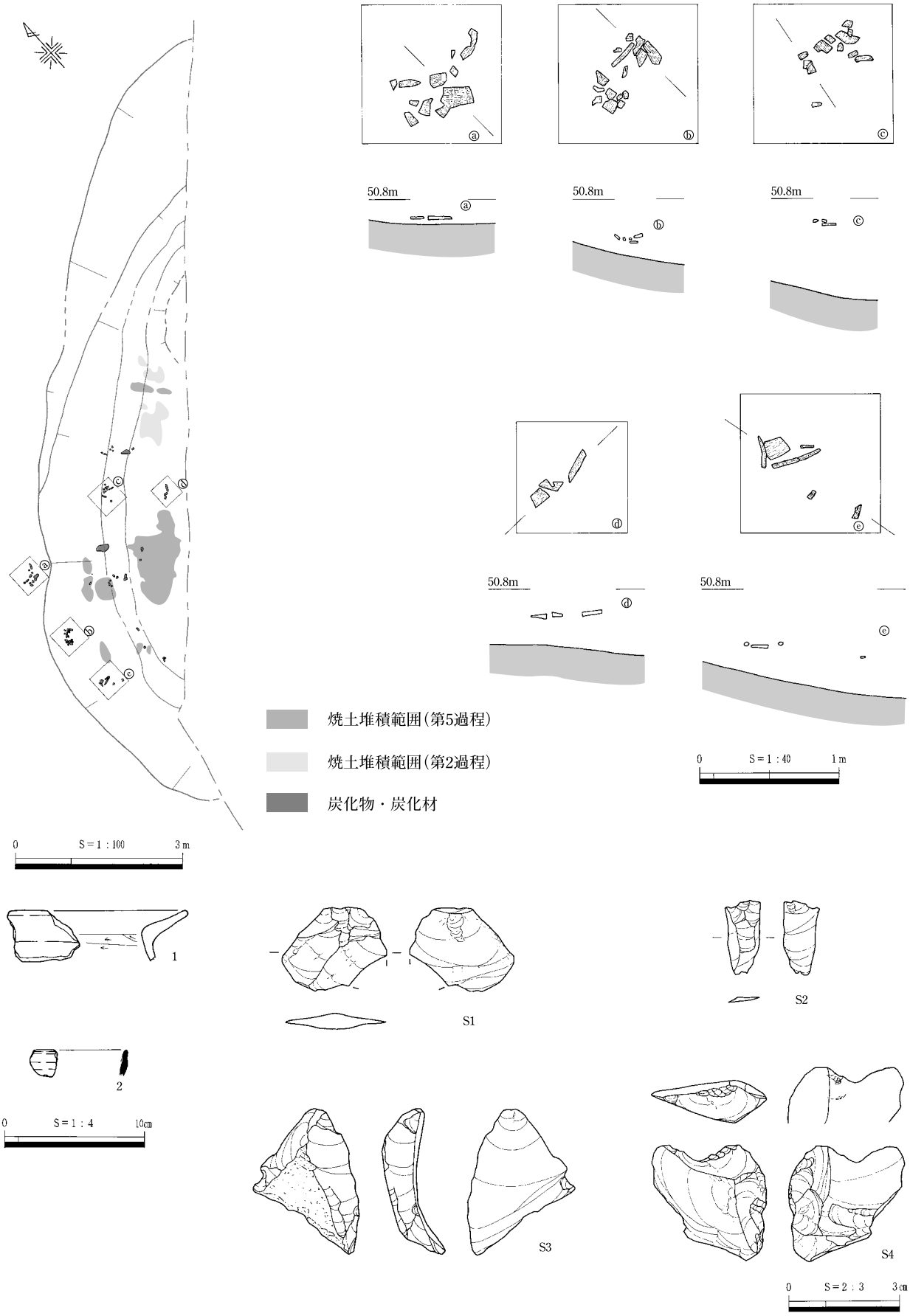


第58図　西坪岩屋谷古墳周溝埋没過程

第１過程は、埋土下層にあたる⑨～⑫・⑮～⑰・㉒～㉕層である。地山に近似した色調を呈す堆積であり、にぶい黄褐色土とにぶい黄橙色土が主体となす。地山ブロックなどの混入は少ない。これらの層からは、葺石となりえる礫等も含め、遺物は出土していない。

第２過程は、⑧層が該当する。焼土および炭化物が混入する堆積である。当層は、確認調査Tr１⑨層に相当する。確認調査時においては、堆積状況等から判断し、重複する遺構が存在する可能性も指摘した（第５章第１節）。それをうけて本調査では層位的に掘削し、精査を行ったところ、周溝が埋没する過程においてできた凹地に、焼土等が廃棄されたものとわかった。特に、Ｂ５グリッド周辺に焼土の堆積が顕著である（第59図）。当層から、遺物は出土していない。

第３過程は、⑤～⑦･⑭･㉗層である。黄褐色又は褐灰色を基調とする堆積で、焼土粒および炭化物粒などが少量混入する。これらの層からは、土師器（１）と須恵器（２）が出土した。須恵器高台付皿が出土した確認調査Tr１⑧層（第５章第１節）は、これらの層に相当する。出土遺



第59図　西坪岩屋谷古墳（２）及び出土遺物

物の年代観から判断し、堆積時期は奈良時代と考える。

第４過程は、②層が該当する。黒褐色を呈し、灰黄褐色ブロックなどが少量混入する堆積である。当層より土師器片が３点出土しているが、いずれも小片であり、詳細な年代比定は困難である。

第５過程は、⑬・⑱～㉑・㉖である。灰黄褐色土・にぶい黄褐色土などからなり、焼土および炭化物などの混入が顕著である。⑳層にいたっては、焼土が主体をなす。第59図に焼土および炭化材ⓐ～ⓔの検出状況を図示した。焼土と炭化材はＡ－Ａ’ラインの南西側に点在するが、Ｂ－Ｂ’ライン周辺については、比較的密に検出した。調査の結果、これらの焼土と炭化材は⑧層同様、周溝が埋没する一時期に廃棄されたものであることがわかった。これらの層からは、遺物は出土していない。

第６過程は、③・④層が該当する。③層は灰黄褐色、④層はにぶい黄褐色を呈し、ロームブロックの混入が顕著である。Ａ－Ａ’ライン周辺においてのみ確認した堆積であり、墳丘側を中心に堆積し、周溝外側には堆積しない。これらの層は、ロームブロックの混入が顕著であること、墳丘側のみに堆積することから、墳丘盛土の流土である可能性も考えられる。③･④層からは、遺物は出土していない。

第７過程は、表土直下にあたる①・㉖層が該当する。①層は灰黄褐色土、㉖層はにぶい黄橙色土である。焼土・炭化物などが少量混入する。両層とも、遺物は出土していない。

第１～７の埋没過程の帰属時期を整理すると、第３過程以降の堆積は、奈良時代以降のものと判断できた。第１過程、第２過程の堆積については、帰属する時期は不明である。しかしながら、第２過程の堆積については、周溝が1/3程度埋没した後の廃棄行為に伴う堆積であり、周溝機能時からは、ある程度の時間を経ているものと想定される。

遺物は、上記の１・２のほか、石器Ｓ１～４が出土した。１は土師器の甕口縁部である。口縁部は内外面ともナデ、胴部内面はケズリにより調整される。２は須恵器の坏である。内外面ともナデ調整され、口縁端部はわずかに外反する。

Ｓ１・２・４はサヌカイト製のもので、接点はないが、同一個体の可能性が高い。Ｓ１は平坦な剥離面を打面とする、幅広の剥片である。Ｓ２は目的的な剥片ではないと考える。Ｓ４は剥片素材の石核である。素材となった剥片の主剥離面側を作業面とし、幅広で寸詰まりな、やや肉厚の剥片が剥離されている。打面となった素材剥離の背面には、剥片剥離に伴う加撃痕が残っている。剥片を剥離した面の縁辺には、連続する小剥離が認められる。これは押圧剥離によるもので、剥片剥離の際に生じたものではない。刃器として再利用されたものと考える。Ｓ３は著しく風化した黒曜石製の剥片である。力がうまく抜けなかったのか、末端が大きくウエーブする。背面の剥離面構成からすると、打面と作業面の転位を繰り返したものか。背面には、大きく自然面を残す。

西坪岩屋谷古墳の周溝からは、奈良時代の遺物が出土したものの、確実に古墳に伴うと判断できる遺物は出土していない。よって、周溝埋没が開始した時期については不明である。

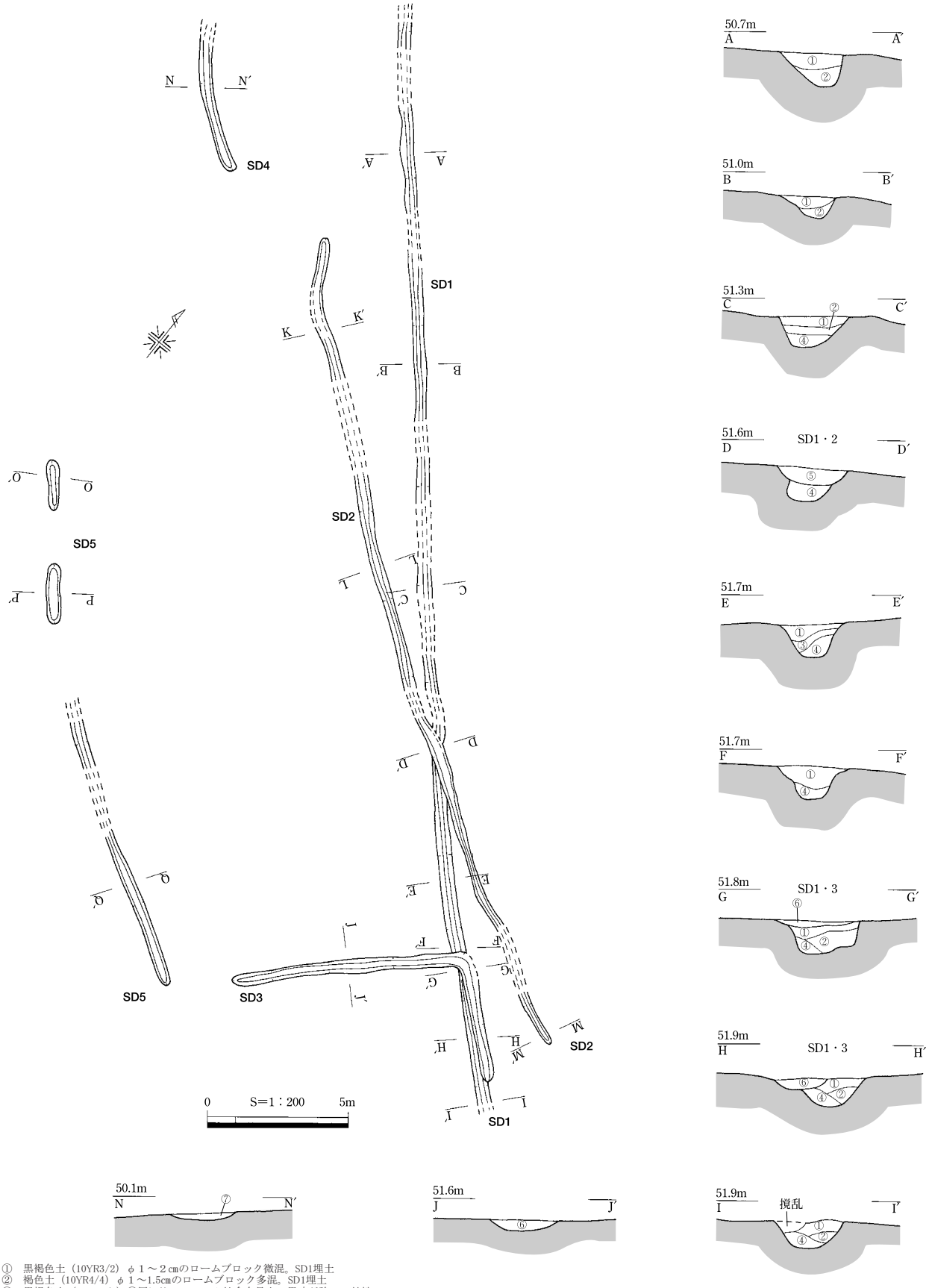
２　溝

SD１～５（第60・61図、表18、PL.39・40）

調査区中央やや南西側で５条の溝を検出した。これらの溝は近接しており、互いの関連性が窺えることから、まとめて掲載することとした。SD１は北端、南端ともに調査区外に延びる。SD２はSD１と軸をほぼ同じにしながら調査区

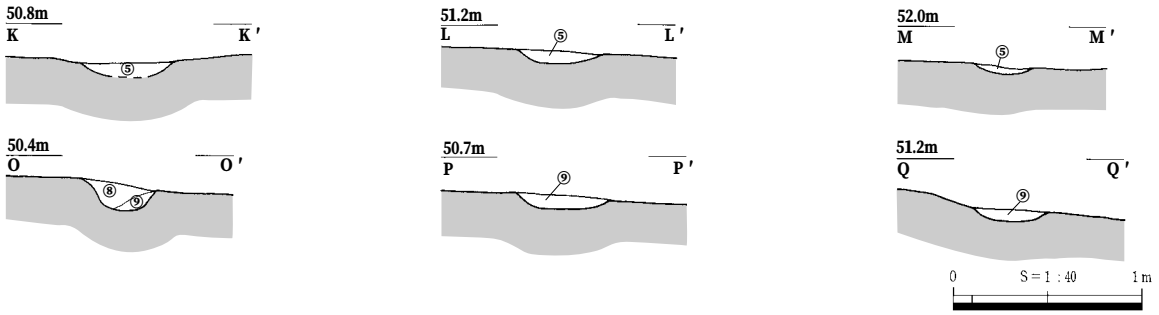
表18　SD１～５計測表

遺構名	主軸方向	長さ（m）	最大幅（cm）	最大深（cm）
SD１	N－42°－W	38.4	52	26
SD２	N－55°－W	29.7	50	8
SD３（北側）	N－44°－E	8.3	50	14
（南側）	N－48°－W	4.3	50	7
SD４	N－45°－W	5.0	46	9
SD５	N－50°－W	19.0	50	16



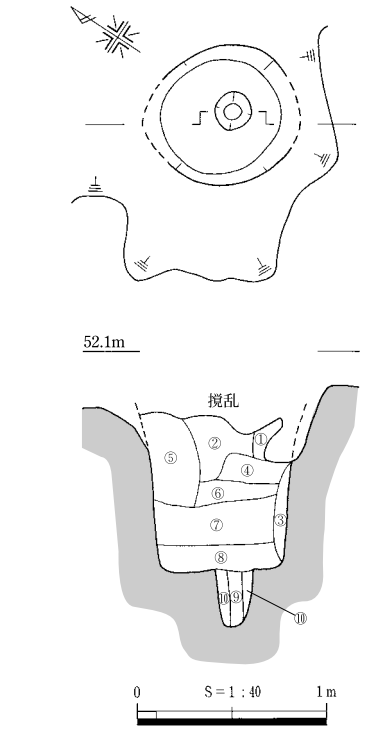
① 黒褐色土（10YR3/2）φ１～２㎝のロームブロック微混。SD1埋土
② 褐色土（10YR4/4）φ１～1.5㎝のロームブロック多混。SD1埋土
③ 黒褐色土（10YR3/1）④層に比べてローム粒含有量少、黒味が強い。粘性強。SD1埋土
④ 黒褐色土（10YR3/1）φ0.5～１㎝のローム粒を微混。締り・粘性やや強。SD1埋土
⑤ にぶい黄褐色土（10YR4/3）φ１～1.5㎝のロームブロック（明褐色土ブロック）微混。SD2埋土
⑥ 暗褐色土（10YR3/4）SD3埋土
⑦ にぶい黄褐色土（10YR4/3）SD4埋土
⑧ 暗褐色土（10YR3/3）ローム粒をほとんど包含しない。⑨層に比べ色調暗い。SD5埋土
⑨ 暗褐色土（10YR3/4）φ１㎝のロームブロック、φ0.2㎝の炭化物粒微混。SD5埋土

第60図　SD１～５



第61図　SD２・５土層断面

中央やや南寄りでSD１を切る。SD４・５はSD１・２とほぼ並行する。SD３はSD１に直交するが、SD１と接する箇所でほぼ直角に屈曲し、SD１と重なるように延びている。いずれの溝も最大幅は50cm前後と類似している。埋土の色調は、SD１が黒褐色を主体となし、SD２～４がにぶい黄褐色土の単層、SD５が暗褐色を呈する。これらの溝の埋土中に砂礫は混入せず、水が流れた形跡は認められない。いずれも周辺からの流入によって自然に堆積したものと考える。また、いずれの溝も底面の高低差は検出面の高低差と大差はなく、検出面の傾斜に沿っている。機能を特定することは難しいが、近年の地割図と照合してみるとSD１は軸が一致している。SD２・４・５の軸も概ねSD１と揃い、SD３はそれに直交していることから、これらの溝は地割りに関連した遺構群とも考えるが、断定することはできない。遺物は、SD１から土師器片が１点しか出土しておらず、いずれの溝も帰属時期を比定することはできないが、SD５が古墳周溝手前３ｍで収束していること、SD１が古墳周溝の北西側を迂回するように延びることなどから、古墳を意識しての掘削が窺え、古墳造営よりも後に設けられた可能性がある。



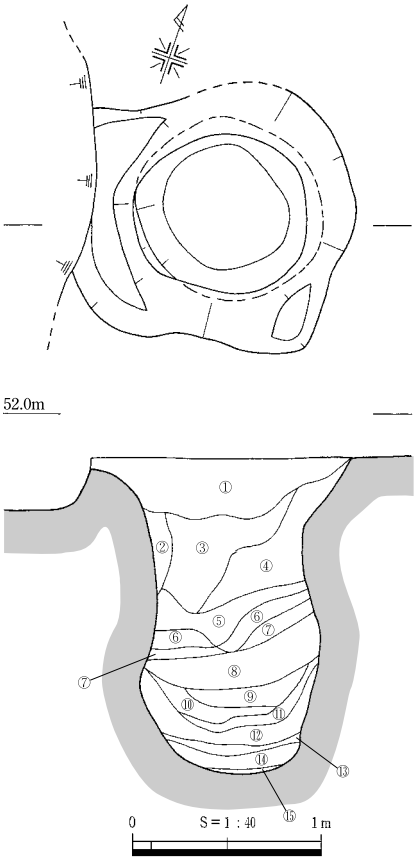
① 褐灰色土（7.5YR5/1）φ0.3～0.5cmのローム粒少混。締りやや強。
② 黒褐色土（7.5YR2/2）φ0.3～0.5cmのローム粒少混。締りやや強。
③ 褐灰色土（7.5YR5/1）φ0.3～1.0cmのローム粒多混。締りやや弱。
④ 褐灰色土（7.5YR4/1）φ0.3～1.5cmのロームブロック多混。締りやや強。
⑤ 灰褐色土（7.5YR5/2）φ0.3～0.5cmのローム粒少混。締りやや強。
⑥ 褐灰色土（7.5YR5/1）φ0.3～1.0cmのローム粒微混。締りやや強。
⑦ 黒褐色土（7.5YR2/2）φ0.3～0.5cmのローム粒混。締りやや強。
⑧ 褐色土（7.5YR4/3）φ0.3cmのローム粒混。締りやや強。
⑨ 灰黄褐色土（10YR5/2）締りやや弱。粘性強。
⑩ にぶい黄褐色土（10YR5/3）粘性強。

第62図　SK１

３　土坑

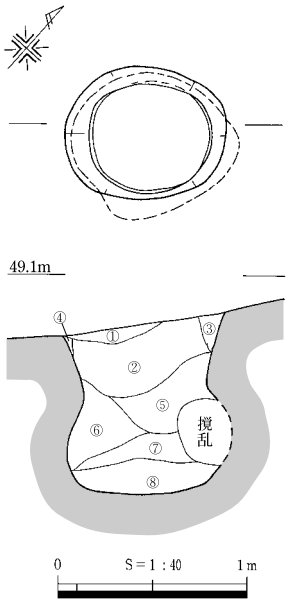
SK１（第62図、PL.40）

調査区の南東部Ｂ３グリッドに位置する。松根採取坑の底面において検出した。本遺構は確認調査時において、Tr６の南西部で検出した土坑である（第５章第１節）。平面形はほぼ円形で、長軸78cm、短軸72cm、検出面からの深さは69cmを測る。底面中央やや南東寄りに長軸20cm、短軸19cm、深さ30cmのピットが掘り込まれている。埋土は10層に分けられる。黒褐色土と褐色系の土が流入を繰り返しながら自然に堆積したものと考える。底面ピット⑨層はしまりが弱く、⑩層はやや強い。形態的な特徴から、いわゆる落とし穴と考える。遺物が出土しておらず、本遺構の帰属時期は不明である。



① 黒褐色土（7.5YR3/1）橙色ローム粒が斑状に混。φ0.3～0.5cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。
② 灰黄褐色土（10YR4/2）φ0.3cmのローム粒混。締りやや弱。
③ 黒褐色土（10YR3/1）φ0.3～0.5cmのローム粒微混。粘性やや強。
④ 黒褐色土（10YR3/2）φ0.3cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。
⑤ 灰黄褐色土（10YR4/2）φ0.3cmのローム粒混。締り・粘性やや強。
⑥ 褐色土（10YR4/4）φ0.3～0.5cmのローム粒混。締り・粘性やや強。
⑦ 黒褐色土（10YR3/2）φ0.3～0.5cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。
⑧ 黒褐色土（10YR3/1）φ0.3～0.5cmのローム粒混。粘性やや強。
⑨ にぶい黄橙色土（10YR6/4）φ0.3cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。壁面の崩落土か。
⑩ 褐灰色土（10YR4/1）φ0.3cmのローム粒混。締りやや弱、粘性やや強。
⑪ 黒褐色土（10YR3/1）φ0.3cmのローム粒少混。締りやや弱、粘性やや強。
⑫ にぶい黄褐色土（10YR5/4）φ0.3cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。壁面の崩落土か。
⑬ 黒褐色土（10YR3/2）φ0.3cmのローム粒少混。締りやや弱、粘性やや強。
⑭ にぶい黄褐色土（10YR5/3）φ0.3cmのローム粒少混。締り・粘性やや強。壁面の崩落土か。
⑮ 黒褐色土（10YR3/1）φ0.3cmのローム粒少混。締りやや弱、粘性やや強。

第63図　SK２



① 灰黄褐色土（10YR4/2）φ１～２cm程度のローム ブロック少混。
② 黒褐色土（10YR3/1）φ１cm以下のローム粒少混。
③ にぶい黄褐色土（10YR5/3）φ１～２cmの黒褐色土ブロック混。粘性やや強。
④ にぶい黄褐色土（10YR5/3）φ１～２cmの黒褐色土ブロック混。③層に類似。粘性やや強。
⑤ 黒褐色土（10YR3/2）φ１cm以下のローム粒を斑状に少混。
⑥ 黒褐色土（10YR2/2）φ１cm以下のローム粒を少混。
⑦ 黒褐色土（10YR2/2）φ１～２cmのロームブロック混。
⑧ にぶい黄橙色土（10YR6/3）φ１～２cm程度の黒褐色土ブロック少混。粘性やや強。

第64図　SK3

SK２（第63図、PL.40）

調査区の東端部Ａ１グリッド、標高51.8mの平坦面に位置する。

表土除去後のⅡ層上面において検出した。平面形はほぼ円形で、長軸1.6m、短軸1.4mを測る。検出面からの深さは1.7mとかなり深い。湧水を排しながら底面を慎重に精査したが、底面ピットは検出していない。埋土は15層に分けられ、周辺からの流入と壁面の崩落をくり返しながら堆積したものと推察する。底面ピットは有しないものの、形態的特徴から、いわゆる落とし穴の可能性を考える。遺物が出土しておらず、本遺構の帰属時期は不明である。

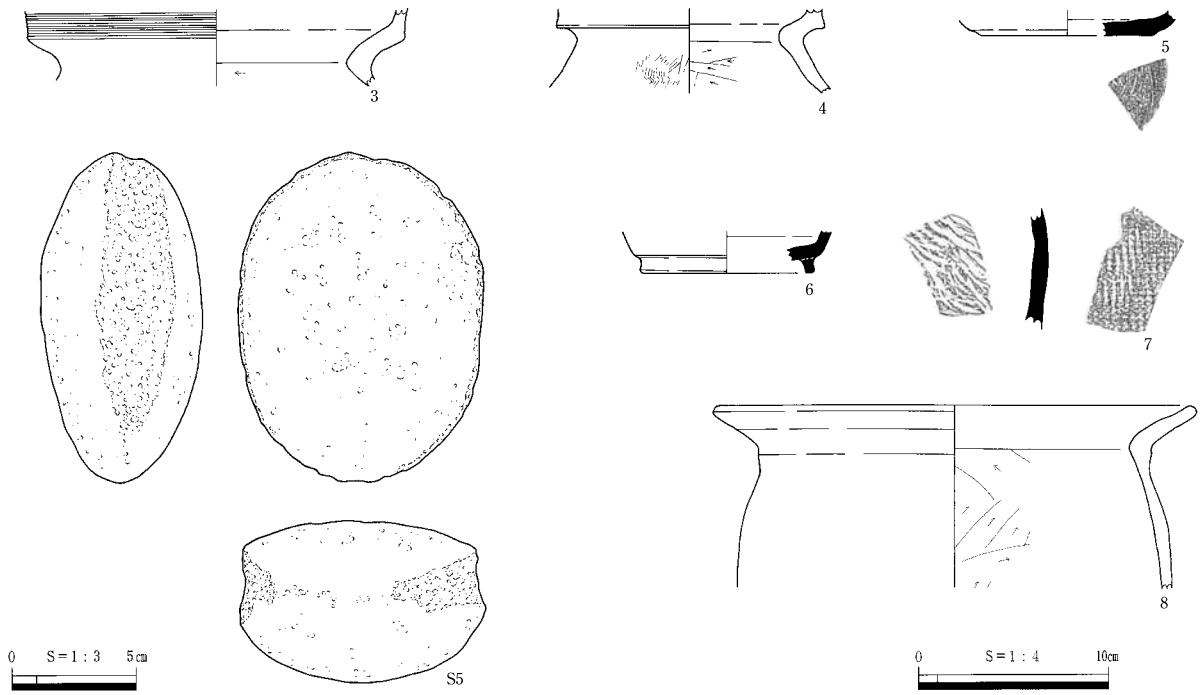
SK３（第64図、PL.40）

調査区の北西端部Ｅ３グリッド、標高 49.8 ～ 50.0m の緩斜面に位置する。表土除去後、Ⅲ層直上において検出した。平面形は楕円形で、長軸 85cm、短軸 70cm、検出面からの深さは 96cm を測る。底面ピットは有しない。埋土は８層に分層でき、自然堆積の様相を示す。主に黒褐色土が主体となし、最下層⑧層はローム由来とみられるにぶい黄橙色土が堆積する。底面ピットは有しない。形態的特徴から、いわゆる落とし穴の可能性を考える。遺物が出土しておらず、本遺構の帰属時期は不明である。

４　遺構外出土遺物（第65図、表19・20、PL.41）

本項では、調査地内から出土した遺物のうち、遺構に伴わないものを取り扱う。土器は３～８、石器はS5を図化した。いずれも表土及び撹乱土からの出土である。

甕（３）は口縁端部を欠いているが、少なくとも口縁端面に５条以上の平行沈線を施す。甕（４）は口縁端面はナデにより調整される。３・４は弥生時代後期後葉に比定できる。５～７は須恵器である。



第65図　遺構外出土遺物

５は坏の底部片である。底面には回転糸切りによる、切り離し痕跡が残る。６は高台付坏である。回転ナデにより調整され､底面の切り離し痕跡は不明である。甕胴部片（７）は､外面に平行タタキ痕跡、内面に同心円の当具痕跡が明瞭に観察できる。８は口縁部が「く」の字状に屈曲する土師器甕である。外面及び内面口縁部はナデ、胴部内面はケズリにより調整される。５～８はいずれも古代に帰属すると考える。その内６は、８世紀代のものと考える。

S5は、礫石器である。長楕円形礫の下端を除いて、敲打痕が巡る。敲打は器体をえぐるように施されている。表面は研磨され、平滑となっている。敲打痕は使用痕というよりも、施溝を意図したものと考える。

第３節　まとめ

西坪岩屋谷遺跡では調査の結果、西坪岩屋谷古墳周溝１基、溝５条、土坑３基を検出した。また、総数は少ないものの、古代の土器を中心に、弥生土器、サヌカイトの石核及び剥片、黒曜石の剥片等が出土している。ここでは、本遺跡の調査成果を時代毎に概観し、まとめとしたい。

弥生時代以前

弥生時代以前に明確に帰属する遺構は確認していないが、SK１～３は形態的特徴から判断し、落とし穴と考えており、当該期に帰属するものと想定している。また少数ながら、当該期の遺物が出土した。土器では、弥生時代後期後葉の甕片が出土した。近隣に当該期の遺跡が存在するものと推定する。他の遺物としては、サヌカイト製の石核及び剥片、黒曜石製の剥片などが出土した。これらの石器はすべて周溝埋土出土であり、出土した地点が狭い範囲に限定される。また、サヌカイト製の石核と剥片は、接点がないものの同一の個体と思われる資料である。これらのことから、出土量は少ないものの、調査地南側の緩斜面において石器製作を行っていた可能性は高い。

古墳時代

当該期の遺構は、西坪岩屋谷古墳周溝１基を調査した。西坪岩屋谷古墳は、丘陵西側の傾斜変換点に占地する小円墳である。古墳は単独で位置し、古墳墳丘が調査対象地外に現存する。周溝内からは、確実に古墳に伴うと判断できる遺物は出土せず、帰属時期は不明である。西坪地内においては、他の古墳の存在、あるいは当該期の集落は確認されていないことから、当地の古墳時代の様相を解明するには至らない。しかしながら、当該期の遺物散布地が確認されており、今後、資料が増加する可能性があると考える。

古代以降

確実に該期に帰属する遺構は検出していないが、調査地内から８世紀代に比定される須恵器などが一定量出土していることから、近隣に古代の遺跡が存在する可能性が高い。西坪岩屋谷古墳の周溝が埋没する過程において、古代以降に廃棄された焼土及び炭化材を検出したこともその蓋然性を高める。

SD１～５は、並行及び直交する平面的な位置関係、規模及び形態が類似することなどから、それぞれが有機的なつながりをもつ遺構群と捉えている。いずれも流水の痕跡は窺えず、区画溝と目される。これらの溝は、現代の地割りに概ね並行することから、区画が踏襲された可能性もある。遺物はSD１より土師器の小片が出土したのみであり、これらの溝の帰属時期は不明である。しかしながら、古墳との平面的な位置関係をみると、あたかも古墳の存在に制約を受けながら溝が配置されたありかたを示し、SD１～５が掘削された時期の上限を示唆するものと考える。

以上、調査成果を概観してきた。本調査により、周溝の一部のみではあるが西坪岩屋谷古墳に初めて調査が及び、周溝の形態及び規模等を確認した。また、近隣に古代の遺跡が存在する可能性が高まるなど、新たな知見も得られた。しかしながら、遺構、遺物とも密度が希薄であったことから、当地の各該期の様相を解明するところまでには至っていない。今後、調査例の増加により、より詳細な検討が可能となることに期待したい。

表19　土器観察表

No.	遺構（地区） 層位名	挿図 PL.	種類 器種	法量（cm）	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
1	古墳周溝 埋土上層	第59図 PL.41	土師器 甕	器高3.7△	外面口縁部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密（砂粒を含む）	良	内外面橙色
2	古墳周溝 埋土上層	第59図 PL.41	須恵器 坏か	器高1.9△	内外面口縁部回転ナデ。磨耗のため調整不明瞭。	密（砂粒を含む）	良	内外面灰白色
3	表土	第65図 PL.41	弥生土器 甕	器高4.1△	外面口縁部５条以上の平行沈線文。磨耗のため調整不明瞭。 内面口縁部磨耗のため調整不明。頸部ケズリ。	密	良	内外面浅黄橙色
4	D3グリッド 撹乱土	第65図 PL.41	弥生土器 甕	器高4.5△	外面口縁部ナデ。頸部・肩部ハケ、ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面橙色
5	B3グリッド 表土	第65図 PL.41	須恵器 坏	底径8.8※ 器高1.4△	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。 内面体部・底部回転ナデ。	密	良	外面浅黄橙色 内面にぶい黄橙色
6	調査区南側 表土	第65図 PL.41	須恵器 高台付坏	底径8.4※ 器高2.2△	外面体部・底部回転ナデ。底部切り離し不明。 内面体部・底部回転ナデ。	密（砂粒を含む）	良	内外面灰白色
7	A1グリッド 表土	第65図 PL.41	須恵器 甕	器高6.5△	外面平行タタキ。 内面同心円状当具痕。	密	良	内外面灰色
8	A3グリッド 表土	第65図 PL.41	土師器 甕	口径25.0※ 器高9.7△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	外面橙・明黄褐色 内面橙・にぶい黄橙色

表20　石器計測表

No.	遺構（地区） 層位名	挿図 PL.	種類	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
S1	古墳周溝 埋土上層	第59図 PL.41	剥片	サヌカイト	2.2	2.8	0.55	2.3	
S2	古墳周溝 埋土下層	第59図 PL.41	剥片	サヌカイト	2.0	0.95	0.15	0.3	
S3	古墳周溝 埋土上層	第59図 PL.41	剥片	黒曜石	3.9	2.85	1.7	6.2	
S4	古墳周溝 埋土下層	第59図 PL.41	石核	サヌカイト	3.1	3.1	1.15	7.3	
S5	F3グリッド 表土	第65図 PL.41	不明		13.0	9.7	6.4	990	